

2026年4月12日

主日礼拝

礼拝讃美歌⇒444番 (SK 姉)

『汚れと恥との』

聖書⇒詩編 117 編 (MM 姉)

『すべての国よ、主を賛美せよ。
すべての民よ、主をほめたたえよ。
主の慈しみとまことはとこしえに／
わたしたちを超えて力強い。
ハレルヤ。』

(祈り)

礼拝讃美歌⇒13番 (旧 153 番)

『わが主よ星の輝く』

聖書⇒コロサイの信徒への手紙 3 章 1~4, 16~17 節 (KT 姉)

『さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。』

キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、論し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。』

(祈り)

礼拝讃美歌⇒216番

『キリストには代えられません』

聖書⇒ペトロの手紙二 3 章 18b 節 (CN 兄)

『このイエス・キリストに、今も、また永遠に栄光がありますように、アーメン。』

(祈り)

礼拝讃美歌⇒241 番 (KH 姉)

『主の御稜威と』

《パン裂き》

聖書⇒マタイによる福音書 26 章 26~30 節 (EK 兄)

『一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。言うておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。』

(式)

礼拝讃美歌⇒149 番 (旧 220 番)

『主イエスを覚えんため』

《建徳》

聖書⇒ヨハネによる福音書 20 章 31 節 (SK 兄)

『これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。』

聖書⇒ヨハネによる福音書 1 章 1~5, 10~13 節

『初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。』

言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。』

聖書⇒ヘブライ人への手紙 11 章 3 節

『信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。』

聖書⇒マタイによる福音書 24 章 36 節 (ES 姉)

『「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。』

聖書⇒マタイによる福音書 24 章 50~51 節

『もしそうなら、その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、偽善者たちと同じ目に遭わせる。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。』

聖書⇒マタイによる福音書 25 章 12 節

『しかし主人は、『はっきり言っておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。』

聖書⇒マタイによる福音書 25 章 30 節

『この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。』』

聖書⇒マタイによる福音書 26 章 1~2 節

『イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると、弟子たちに言われた。「あなたがたも知っているとおりに、二日後は過越祭である。人の子は、十字架につけられるために引き渡される。』

聖書⇒マタイによる福音書 25 章 1~13 節

『「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。愚かなおとめたちは、賢い』

おとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。しかし主人は、『はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。だから、目を覚ましていなさい。

あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。』

聖書⇒ヨハネによる福音書 3 章 16 節

『神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。
独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。』

聖書⇒ヨハネによる福音書 6 章 38~39 節

『わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。』

礼拝讃美歌⇒274 番（旧 302 番）

『御国に住まいを』

《建徳要旨》